

カンキツ園におけるチャコウラナメクジの生態と防除

1. はじめに

チャコウラナメクジはヨーロッパ原産で、終戦後に日本に侵入してきたと考えられている帰化動物である。現在では県下各地のカンキツ園に広く分布し、場所により大発生して果実を加害するにもかかわらず、生態や防除法に関しては不明な点が多かった。そこで本種の生態と防除についての研究に平成10年から5ヶ年間取り組んだ。

2. 特徴

本種はカタツムリやサザエ等の巻き貝類と近縁で、植物性のものを食べる。その口には菌舌と呼ばれるネコの舌のようなヤスリ状の器官があり、これでこすり取るようにして食物を摂取する。多くの農作物を加害し、特に柔らかい部位を好む傾向がある。カンキツ類では主に果実、幼葉、花卉が食害される。

また、在来のナメクジ種と比較して乾燥に強く集団生活を好む傾向があるため、農耕地では生息密度が高くなりやすい。

3. 発生消長

本種は主に12月から4月にかけて断続的に産卵し、その後死亡する。日光の当たらない土壌表層に産下された卵は、3月から5月に順次孵化する。カンキツ園内では5月から梅雨明け頃までの間、個体の密度が高くなり、同時期に樹体へ登る個体が多くなる(図1)。この時期の幼果への加害が問題になるケースが多い。

場内で行った試験において、裸地園と草生園を比較すると、土壌表面で活動する個体は草生園で多いが、株元に登る個体数にはほとんど差がない(図1)。

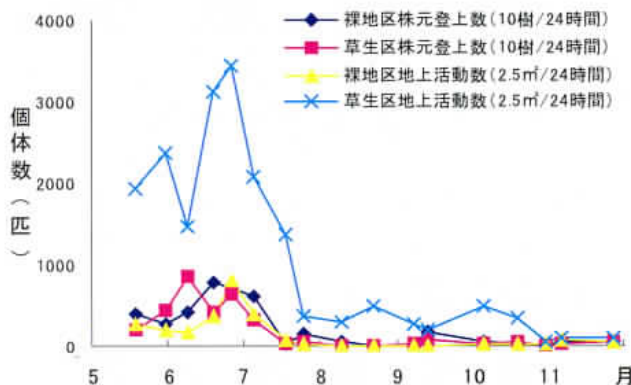


図1 チャコウラナメクジの活動数(場内2000年)

したがって本種の樹体への登り数は、園内の個体密度の他、除草などの土壌管理にも影響されると考えられる。

4. 防除方法

①忌避資材による防除：本種は銅を忌避するため、樹体株元に銅板を巻き付ける方法は登り阻害効果が高い(図2)。しかし降雨時など資材表面が濡れると忌避効果が低下する。また、処理に大きな労力を要し、樹の生長にあわせて銅板を巻き直す必要もある。

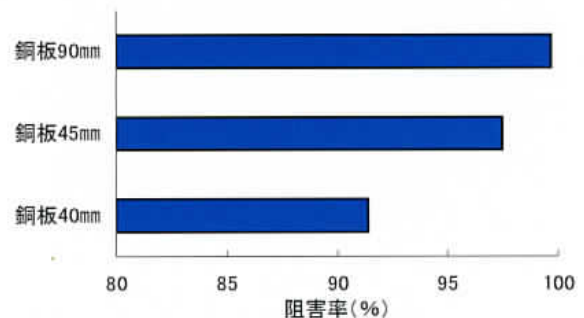


図2 銅板の樹体登り阻害効果

②薬剤散布による防除：カイヨウ病防除に登録があるICボルドー66Dは、本種に対する登録はないが、被害の防止効果が認められた。また、ラービフロアブルの800倍は忌避効果と殺虫効果を併せもつが、残効はやや短いと考えられる(図3)。

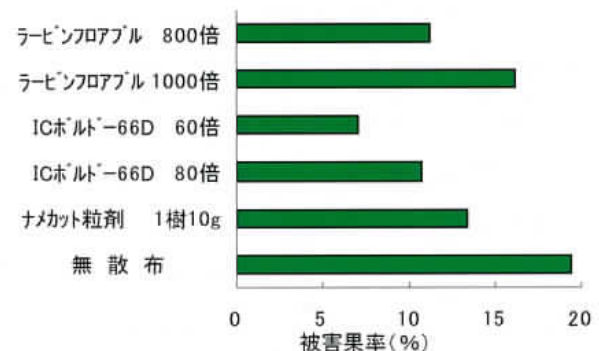


図3 各薬剤の被害防止効果

③誘引殺虫剤による防除：現在メタアルデヒドを主成分とする剤が主流であるが、降雨等で分解されやすく、残効はあまり期待できない。

(虫害班 主任研究員 大西論平)

編集発行

愛媛県立果樹試験場

〒791-0112 松山市下伊台町1618 TEL 089-977-2100 FAX 089-977-2451